

# 県歌になった「信濃の国」の誕生

太田 今朝秋



私は県歌になった「信濃の国」の歌と組んで既に五十年が過ぎた。この歌の原曲「唱歌 信濃の国」を所有する信濃教育会の教育博物館へ行つては資料を見せてもらい、知識を深めてきたが、今もって浅井冽が作詞した当時の記録とかの資料が見当たらない。そこで、松本市教育

会が平成二年に浅井冽遺稿集を発行したので、その時の編集委員にも聞いてみたが見あたらなかったことだった。

ところで、この歌をうたっていると、自然とうたっている者同士の心が通じ合い、親近感を持ち連帯感が湧いてくるのである。それを感じるのには私一人だけののだろうか。浅井は作詞に際してそのことを意識していたのかどうか、資料で確かめてみたかったのである。

現在の信州即ち長野県は、明治四年の廃藩置県のあと、筑摩県庁（南信）が松本に在り、同九年六月に火災に遭つて焼失したため、時の政府は同年八月独自の判断で長野県（北信）に併合させてしまったのである。いわゆる吸収合併である。それ以後南信の住民は県庁の所在地が遠くなって不便をきたし、折にふれて移庁・分県問題を提起するようになった。

たまたまこの頃、中央においても板垣退助らが「自由民権運動」を起こしており、それに呼応するかのように本県でも松本を中心に市川量造・松沢求策らが「奨匡社」という政治結社を作って、運動の一環として移庁・分県問題を県議会や政府に陳情や請願をした。浅井も名を連ねていた。わけても浅井の松本中学校での教え子の木下尚江は、明治二十四年代には信濃毎日新聞に移庁に関する大論文を連載し、また一般町民も参加する講演会を開いて騒擾事件を起こすまでに紛糾したこともあった。

浅井はもろろんこれら社会の動静を見て知ってい

たはずだ。ところが明治十九年三十八歳のとき松本中学から長野師範学校に転勤となり、今まで北信の県庁所在地「長野」を敵対視してきたその長野の住人にならざるを得なくなり、今まで教師の傍ら行ってきた政治運動は一切やめて教師本来の姿に立ち帰り、四十年の長い間長野の住人として師範学校に奉職したのである。

それから明治二十七・二十八年の日清戦争のあと、日本中が戦勝気分ですべて軍歌をうたい、学校においても唱歌の教材として軍歌をうたわせたことを、音楽教育に熱心であった第五代長野師範校長で、信濃教育会長を兼務していた本県上田藩出身の正木直太郎が大変心配し、同三十一年新たに地理歴史をとり入れた唱歌教材を作るべく師範の浅井・内田両教諭に依頼した。その結果六曲が出来、そのうちの一つが「信濃の国」であった。

この「信濃の国」の歌詞を熟読してみると、かつて本県には十一藩の小藩が分立し、何百という峠に

より十州（八県）に接する地形で、しかも全面積の七十六パーセントが山林地帯。従って林業と養蚕製糸業以外に産業らしいものがない貧乏県が二つ併合して出来たのが長野県である。浅井は松本在住時代の体験からも南信・北信というような分裂の争いはしないように、「信濃の国は一つ」という大原則に立って、歌詞の冒頭に「信濃の国は十州に 境連ぬる国にして」と大上段に決めつけ、それから地名、人名、景勝地に至るまで多くの固有名詞を用いて南・北信のバランスを考えて地域配分をした。そのためうたっているうちに、自然に信州を一巡した気分になり、うたう人の心が一つになるような配慮がなされているように思うのである。それからこの長い詞の中に「長野」という字句が見当たらないのは、浅井が意識的に使わなかったように考えられるのである。

そこで、この詞に明治三十二年師範の音楽教師依田弁之助が作曲したのであるが、その旋律は雅楽調

で単調なため、六番までうたう途中で飽きてしまい、誰もうたう者が無くなってしまった。その依田が病気で休職となり、後任に三十二年十一月青森師範から二十七歳の北村季晴が赴任してきた。依田よりも東京音楽学校二年後輩であった。

北村の先祖は北村季吟（きん）という有名な国学者で、徳川第五代將軍綱吉の侍講をつとめ、また俳聖松尾芭蕉の師匠でもあった人。さらに父親の北村季林も第十四代將軍家茂の侍講をつとめた人である。ところが季晴は突然変異というか、たまたま島崎藤村と同級であった明治学院を中途退学し、明治二十四年東京音楽学校へ入学した。その時の校長は本県高遠藩出身の伊沢修二で、明治十一年二十七歳で西洋音楽を勉強してアメリカ留学から帰国された人であった。伊沢は開校初代の校長で、音楽学校運営の二大目標を次のように掲げていた。

- 第一 東西二洋の音楽を折衷して新曲を作ること
- 第二 将来国楽を興すべき人物を養成すること

であった。北村は伊沢校長がえがいた近代日本の音楽家像を忠実に生きた明治の音楽家の一人と云える人だったと私は思っている。

北村は青森師範に二年間勤めたあと長野師範に転任し、浅井との出会いがあったのであるが、その頃「歌劇」の創作の勉強をはじめており、「露宮の夢」という戦争物語や、御伽話の桃太郎を題材にした「ドンブラコ」などの創作を手がけていた。北村は日本における歌劇の創始者としても有名である。

北村は浅井から「信濃の国」の詞を見せられたとき、一節が八句で、それが六節までという長編の詞で、しかも七五調の整った詞であるので、まず歌詞をはっきりと発音させ、途中で飽きさせないようにしなければならぬと直感されたことであろう。そこで全体を邦楽・洋楽の和洋折衷の三部形式として一〜三番と五・六番を邦楽調のヨナ（ファとシの音）抜き五音階で歯切れのよい勇壮闊達な旋律にし、真ん中の四番にナ（シ）を入れて洋楽調の

優雅な旋律に一転させ、次の五番で再び力強く勇壮に「旭将軍義仲も」とうたい出すようにして変化をもたせるように作曲した。これが当時のわが国では全く新しい作曲で大成功。それが明治三十三年十月二十五日長野師範学校の創立記念大運動会に女子部生徒の遊戯とともに発表されて一躍有名になって愛唱された。

北村はわずか一年四か月で退職し、帰京して作曲等の音楽専門の道に入られたが、とにかく「信濃の国」は明治三十三年十月に発表されてから今日まで一〇八年もの長い間長野県民の愛唱歌としてうたい継がれてきた名曲で、現在でも評論家は勿論音楽家の誰もが「信濃の国は名曲」だと称讃している。

つい昨年九月終わったが、毎年松本で開催されるサイトウキネン音楽祭で、今回も松本城内の大庭園に吹奏楽の児童生徒、一般人三千二百人が集まり、小澤征爾氏自らが指揮して「信濃の国」の演奏を指導されている。また、平成十年長野市で開催された

冬季オリンピックの日本選手団の入場行進の際も

かねばならない。

(平成二十二年一月)

「信濃の国」が演奏され、世界中に響き渡り喝采を受けた。

名歌とはすばらしい歌詞とすばらしい曲調が完全に一体となって形成されるもので、しかも大勢の人に長く愛唱されてうたい継がれているところに意義がある。

そしてまたこの歌のおかげで本県における戦後の二大危機が解決された事例がある。それは昭和二十三年三月県議会に起こった分県問題と、同二十八年六月軽井沢町に起こった米軍浅間山演習地化反対県民大会のことである。いずれもその場で期せずして自然発生的にうたい出された「信濃の国」の大会唱であった。

さらに、昭和五十一年には「信濃の国」は県民共有の文化遺産である、ただうたい継ぐだけでなく形にして伝承してはと、県民みんなが十円一円募金をして長野と松本に歌碑を建立したことも記録してお